慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	土師器と須恵器の起源について：一九七三年十月二十日,三田史学会大会講演要旨
Sub Title	On the origin of "Hajiki" and "Sueki" potteries with special relation to ancient Korean pottery
Author	金, 廷鶴(Kim, Jong-hak)
Publisher	三田史学会
Publication year	1974
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.46, No.1 (1974. 6) ,p.29- 41
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19740600-0029

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

土師器と須恵器の起源について

（一九七三年十月二十日、三田史学会大会講演要旨）

金　廷　鶴

一

土師器と須恵器は周知のように日本においては古墳時代からあらわれた特徴的な土器である。土師器は赤褐色の軟質土器をいい、須恵器は灰褐色の硬質土器をいう。そして日本の考古学においては、土師器は弥生式土器の発展したものであり、須恵器は大陸―多分朝鮮南部あたりから伝えられた新しい土器文化であろうと解釈されているようである。土師器が弥生式土器から発展したものと見る根拠のうちもっとも大きな理由は、土師器も弥生式土器のように赤褐色であり軟質であって多分同じ窯法によったと思われたからのようである。他の一つの理由は土師器の遺跡から弥生式系統の土器も発見されるからである。

しかし日本の考古学では弥生後期の土器と土師器との区別が明らかにされておらず、また弥生式土器から土師器への土器形式の変化が十分証明されていないようである。したがって土師器の編年に用いられる土器形式の基準が明らかでないように思われる。

朝鮮では南部の一定の地域で紀元一世紀頃から日本の土師器と須恵器に殆んど同じな新しい土器文化が起った。それで

私は日本の土師器と須恵器の起源の問題を朝鮮側の資料と比較しながら愚見を述べたい。

朝鮮でのこのような新しい土器文化の標式的遺跡は慶尚南道昌原郡熊川貝塚（うんちょん）である。この遺跡はわれわれが一九五九年から三回にわたって発掘したものであるが、ここからは赤褐色軟質土器（土師器）と灰褐色硬質土器（須恵器）とが同じ層位から多数出土した。この二種の土器は器形も製法もほとんど同じであるが、ただ赤褐色軟質土器は在来の開放窯で焼かれたものであり、灰褐色硬質土器は新しい窯法――多分登窯によって焼かれたと思われる。つまり前者は露天窯で摂氏七〇〇度前後の低い温度で焼かれ、酸化焔によって土器の色調が赤褐色になったのであるが、後者は登窯で一三〇〇度前後の高い温度が得られ、還元焔によって焼かれたので灰褐色の硬い土器が作られたのである。

二

朝鮮半島には中国から戦国末頃、灰陶文化が伝えられ、在来の無文土器文化と、ともに併せ行われた。この無文土器は日本の弥生式土器と関聯のある土器文化であるが、前記の灰陶は丸底に縄席文の叩き文のあるのが特徴である。このように相異なる二つの土器文化が紀元前一世紀頃まで並び行われたのであるが、紀元一世紀頃から朝鮮の南部地域でこの二つの系統の土器文化が複合されて上述のような新しい熊川式土器文化が形成された。つまり紀元前の無文土器系はその窯法（露天窯）をかえずに熊川式土器における赤褐色軟質土器となったが、たゞ成形法と器形において新しい要素が加えられた。一方灰陶系は丸底の特徴と成形法において熊川式土器文化に影響を与えたが、さらに窯法において新しい登窯が発明されたのである。このように熊川式土器文化は前段階の二つの相異る系統の土器文化を受けついで、新しい土器文化を作り上げたので、製法や器形において複雑である。二つの異なる窯法によって赤褐色軟質土器（土師器）と灰褐色硬質土器（須恵器）となり、用途も煮沸用、貯蔵用、祭祀用に分化されて来た。器形には、小形広口丸底壺（坩形土器）、器台、高

坏、台付壺、丸底壺形土器、丸底甕形土器、鉢形土器、甑（こしき）、椀形土器、皿形土器、コップ形土器、竈（かまど）形土器などがあり、驚くほど多様化されたことが分る。上述のように土器の用途の分化や多様化は生活文化の急激な発達を意味するものであるが、これは紀元一世紀頃よりこの地域における鉄器文化と農耕文化の発達によるものであろう。

熊川貝塚の遺物層から出土した木炭をサンプルとしてアメリカのミシガン大学放射能研究所によってカーボン14の測定がなされたが、1910±120 B.P. の年代が知られた。これは大体 A.D. 四〇年ということになるが、誤差を併せ考えて約一〇〇年ぐらいの幅を推定することが出来るであろう。つまりこの遺跡は紀元一世紀から二世紀頃までのものと考えられる。

このような年代推定は熊川貝塚とほぼ同じ文化内容をもった金海貝塚、東萊貝塚、梁山貝塚などによって傍証される。特に金海貝塚からは王莽の貨泉が発見されたので、その文化の上限が紀元一世紀頃にあることが確められた。

熊川貝塚や金海貝塚の住民は相当な期間にわたって継続して住んでいたと思われるので、その文化内容は特に土器において先後の形式に分けられるようなものがある。しかしいずれの遺跡も貝塚の堆積であるので、上下の層位を見出すことは出来なかった。多分それらの住民は断絶なしに続いて同じ居住地に住んでいたのではないかと思われる。

三

次にそれらの土器について少しく記述しよう。

1　小形広口丸底壺（坩形土器）

これは球形の胴部に広く高い口辺部がついたもので、熊川式土器の最も特徴的な器形の一つである。日本の古墳時代のいわゆる小形坩形土器と全く同じ器形である。この土器は丸底が原型で、器台に載せられるように作られたのであるが、

丸底をおさえでやや平たくした器形もあらわれている。坩形土器は赤褐色軟質のもの（土師器）と灰褐色硬質のもの（須恵器）とある。全体の器高が八センチ前後のが一番多いのも日本の坩形土器と似ていて注目される。

2　器　台

器台は前者のような丸底壺をのせるために作られたもので、これも熊川文化期に初めてあらわれた特徴的な器形である。杯部と台脚部とから成りたっているのは高杯形と同じであるが、ただ杯部の中央から台脚部へ穴が通されているのが異る。器形は台脚部の高いのと低いのとあり、また杯部と台脚部の境が鼓形をなしているのもあって、日本の古墳時代の器形と全く同じである。しかし熊川貝塚から出土した器台はすべて灰褐色の硬質のもののみであり、赤褐色の軟質のものが一点もないのは不思議である。器台にのせるべき坩形土器は前述のように赤褐色軟質のものもあるから、これと同じ性質の赤褐色軟質の器台があるべきである。日本には周知の通り土師式の器台があるのと比較して特異な現象といえよう。朝鮮の場合はあるいは器台は堅固でなければならない用途のために軟質のものが作られなかったのかも知れない。これはもっと将来の資料の集積を待たなければならないであろう。

熊川貝塚出土の器台は台脚に透孔のあるものと無いものとがある。台脚の透孔には長方形、三角形、円形のものがあり、一つの器台に長方形と三角形の透孔を併せ用いたもの、或は長方形と円形の透孔を併せ用いたものなどがある。

3　高　杯

高杯には赤褐色軟質のものと灰褐色硬質のものがあるが、灰褐色のものとが数的に優勢である。赤褐色軟質高杯は脚部に一点の外すべて透孔がないのが注目される。これに反し灰褐色硬質高杯はかえって脚部に透孔があるのがより多いのと対照的である。透孔には器台の場合と同じく長方形、円形、三角形のものがあるが、長方形の透孔が最も多い。

坏部は口縁の外反した外側に段をなしたものと、口縁がやや内傾して段をつくったものなどがある。後者は蓋受けの段

になるのであるが、本遺跡からは高杯の蓋は一点も出土しなかったのが注目される。高杯の蓋は熊川文化期より後期に多くあらわれる。

高杯は紀元前の無文土器文化に既に見られたものであるが、この熊川文化期から非常な発達を見、高塚古墳時代に最も数量が多くなるものである。高塚古墳時代の高杯は杯部の口辺部や脚部が多様に発達するのが特徴である。

4　壺形土器と甕形土器

日本の古墳時代の土師器と須恵器において壺形と甕形の区別をすることがあるが、必ずしも器形上の特徴がはっきりと区別されないことが多い。熊川貝塚においてもこの両者の区別は難しい場合がある。大体口径が胴径より大きいものが甕形土器と呼ばれているようであるが、その場合でも頸部の縮約が著しくて、壺形に近いものがある。

熊川貝塚出土の土器のうちには壺形土器が最も多い数量を占めている。胴部が球形をなし、底が丸いのが特色である。この遺跡では平底の壺形土器としては丸底を押して平たくしたものがある。丸底を安定させるためにはやや低い台を作りつける方法がこの時期から始まった。

壺形土器は赤褐色軟質のものと灰褐色硬質のものとがあるが、赤褐色軟質のものがより多数を占めている。これは紀元四・五世紀以後の高塚古墳時代には壺形や甕形の土器は全く灰褐色の硬質のものだけであるのと比べて時代的特色を示すものである。

赤褐色軟質の壺形土器には表面に刷毛目痕があるものと縄蓆文の叩き文のあるのとがある。灰色硬質壺形土器には叩き文が多い。叩き文は土器成形の時に表面を叩き板（拍子）で叩いたためつけられたものであり、内面にはあて具の痕がつきいわゆる青海波文をなしている。このような叩き文の縄蓆文や青海波文が日本の土師器や須恵器にも全く同じように見られるのは注目すべきである。

5　甑（こしき）

甑はやや長めの胴体の深鉢形が典型的なもので、底にあなをあけている。底は丸底と平底があるが、丸底が支配的である。丸底から上に広がる胴体の両側に牛角形把手が上向きにつけられていて、日本の古墳時代の甑にそっくり似ているのはおもしろい。

熊川貝塚から出土した甑は赤褐色軟質のものと灰褐色硬質のものとがあるが、赤褐色のものが絶対多数を占めている。甑はいうまでもなく穀物を蒸すうつわであるが、この遺跡から非常に多数の甑が出土したことはこの時代の生活をうかがわしめるものである。

6　台付壺

熊川文化期の壺形土器は前述のように丸底を特徴とするので、この丸底を安定して坐らしめるために台を作りつける方法をとった。台は低いのが多いが、やや高いのもある。高い台には透孔を飾るのが普通である。熊川貝塚からは台付壺がかなりの数が出土しているが、灰褐色硬質のものが赤褐色硬質のものより多いのが注目される。

7　深鉢形土器

これは口径が胴径よりやや広いものをいうのであるが、大形のものは甕形土器ともいえるであろう。深鉢形は胴部の最大径が中ほどよりやや上にあり、口縁が「く」の字形に外反したのが典型的である。底は丸底と平底とがある。このような深鉢形土器はほとんどが赤褐色軟質のものであることが注目される。これは高塚古墳時代にも全く同じ器形で赤褐色軟質のものが見られる。このような土器は胴部にすすけたものが多く、それらが煮沸用に使われたことを示している。

8　皿形土器、椀形土器

皿形土器は器高四―五センチが普通であり、灰褐色硬質のものと赤褐色軟質のものがある。

椀形土器には把手のついたものがあり、今日のコップ形をしているものがある。

以上が熊川貝塚から出土した土器形式であるが、器形の種類が多様であり、日本の古墳時代の土師器や須恵器に見る器形はほとんど揃っているのを知るであろう。しかし熊川貝塚は大体紀元一―二世紀頃の遺跡であるから日本の古墳時代の土器とは直接には結びつかないであろう。故に次に日本の古墳時代とほぼパラレルな朝鮮の高塚古墳時代の加羅地域の土器について簡単に述べよう。

四

加羅地域では熊川式土器の伝統が後まで続くのであるが、時代が進むにつれて赤褐色軟質土器が少くなり灰褐色硬質土器が多くなって行く傾向にある。しかし特定の器形、例えば煮沸用の鉢形土器などは依然として後まで赤褐色軟質のものをつくっているのが注意される。

小形坩形土器は熊川文化期には赤褐色軟質のものが多かったのであるが、古墳期にはほとんど灰褐色硬質のものとなる。そして丸底をやや平たくした器形が多い。

坩形土器に似た器形の腹部に一孔をあけたいわゆる甑（はそう）が朝鮮の高塚期に初めてあらわれるのは注目すべきである。甑の孔の機能はまだ明らかにされていないが、多分坩形土器と同じく祭祀用のものではないかと思われる。とにかくこの甑の存在は高塚古墳期とそれ以前とを区別する一つの手がかりとなるであろう。

器台は古墳期にはますます発達して丈が高くなり、すそは下の方へ広がって段をつくり変化をみせるようになる。脚部に透孔を上下に幾段もにわたってつくられたのがあらわれ、なお櫛描きの波状文で飾られることもある。

高坏は古墳期には杯部と脚部がともに発達する。坏部は内部がやや深くなる傾向があり、口縁が複雑な変化を見せるの

が特徴である。脚部にも幾つも突帯をめぐらし、長方形、三角形、円形などの透孔を以て飾られる。

古墳期の高坏において特に注目されるのは蓋が多く見られることである。蓋は脚部をさかさまにしたような透孔のあるものがある。

古墳期には高坏に似ているが坏部が深くなって鉢形をした器形が多くなる。台脚付鉢形土器ともいえよう。鉢形の坏部の表面に凹帯をめぐらし、帯と帯の間に三角形文などを配したものもある。このような器形は脚部はあまり高くなく安定感を与えるものである。台脚付鉢形土器は古墳から丸底の長頸壺をのせたまま出土することがあって、その用途がやはり器台としても使われたことをうかがわしめる。しかしそれ自体として物を盛るのにも使われたであろう。

壺形もしくは甕形土器も熊川文化期の丸底の伝統をそのままうけついでいる。ただ口頸部に突帯をめぐらしたり、口縁が発達するのが変化として挙げられるであろう。特にこの時期の壺形の変化の一つにかぞえられるのは頸の縮約が著しく口径が小さいことである。こういう器形は熊川期には見られなかったものである。

古墳期にはまた壺形土器の頸が長くなったいわゆる長頸壺があらわれた。長頸の外側に幾つかの突帯をめぐらし、突帯と突帯の間に波状文を陰刻したのが多い。長頸壺はみな丸底であるが、台をつけたのもある。

古墳期に台付の椀形、または鉢形土器に「D」字形の把手がつくのが一つの特徴といえる。もちろんこのような形の把手は高塚古墳期より前の時代からあらわれているが、この時期になって一層多くなっている。そしてこのような把手付土器のあるものには蓋がつくられたのもある。

深鉢形土器は前述のように古墳期にも続き赤褐色軟質のもので作る伝統がうけつがれている。口縁部が「く」の字形に外反するのも同様である。

古墳時代に新しくあらわれたのは甕と注口土器である。甕は前にも言及したように器形は坩形土器をうけついだようで

あり、その胴部の中腹に一孔をうがったものである。そして胴部や頸部に突帯をめぐらしたのや口縁の発達したものもある。底は丸底が原形であるが、丸底を押してやや平たくしたのもある。甕は灰褐色硬質のもののみである。甕が何に使われたかは前述のように明らかでないが、祭祀用のものであろうことはまちがいないと思われる。

注口土器はやはり中腹に長い管状の注口をつけたものである。加羅地域から出土する注口土器は注口が割合長い竹管のようになっているのが一つの特徴であるようである。

五

以上述べたように朝鮮の南部の特定地域――すなわち加羅地方では紀元一―二世紀頃から日本の土師器と須恵器にあたる新しい土器文化が始まり、紀元四・五・六世紀の高塚古墳時代までその土器文化の伝統が続いたのである。もし日本の古墳時代の土師器及び須恵器との対比を求めるなら四世紀以後の朝鮮の高塚古墳期の土器に目を向けなければならないであろうことはいうまでもない。

日本の考古学では周知のように紀元四世紀頃に土師器だけが作られ、四世紀ないし五世紀後半頃から須恵器が作られたと考えられているようである。しかし上に見たように朝鮮の加羅地方の土器においては土師器と須恵器は同時にあらわれた同じ土器文化であり、ただ用途に従って軟質土器（土師器）と硬質土器（須恵器）との使い分けがあったようである。つまり煮沸用のように軟質土器で足りる場合は燃料の少くてすむ開放窯で焼いたのである。その外は両者において差異はない。故に若し日本の古墳時代に朝鮮から新しい土器文化が伝えられたならば、須恵器だけが選択的に受容されたとは考えられない。

もう一つ重要なことは日本において土師器が弥生式土器から漸進的に発達したということを証明することが出来ないと

いうことである。つまり日本の内部において自然発生的に弥生式土器から土師式土器へと発達したとは考えられない。なお土師式土器と同じ土器形式が朝鮮において既に紀元一世紀頃からあらわれていることは日本の土師式土器の起源をも大陸に求めるのがリーズナブルではないだろうか。そしてそれはまた前に指摘したように須恵器とともに伝えられた可能性が多い。次に具体的に日本の古墳時代の遺跡、遺物についで追求してみたい。

先ず古墳時代の文化中心であった畿内地方において、早い時期の標式的遺跡と考えられる大阪の船橋遺跡と奈良の布留遺跡を見てみよう。

船橋遺跡は周知のように一七〇六年大和川の流路変更によってその河床となった縄文時代から歴史時代にかけての住居址であるが、ここからは多数の土師器と須恵器が出土した重要な遺跡である。私は何年か前にこれらの遺物が収蔵されている京都の平安高等学校を訪れ、それらの土器を実見したことがあるが、その土師器と須恵器が朝鮮の加羅地方から出土した土器とあまりにもよく似ているのは驚くべきことであった。

坩形土器は口辺部が高く口径が広く底が丸い形のもので、高さが八センチ前後であることなど朝鮮出土のそれと全く同じであるのは不思議なぐらいである。つまりそれは同じ陶工によって作られ、同じ用途に使われた土器であることを疑えないように思われるものである。

船橋遺跡からも甑が出土したが、それは丸底から上に広がった長めの胴体であり、その胴体の両側に牛角形の把手がついていることなどやはり朝鮮出土の甑と全く同じである。

壺形土器や甕形土器はみな丸底であり、器の表面に叩き目、または刷毛目の痕のあるのも朝鮮出土のそれらと同じ手法である。また高坏と器台の器形も朝鮮出土のそれらと相似ており、鼓状器台も朝鮮の器台に見られたものである。

船橋遺跡からは土師器と須恵器がともに出土し、土器の種類も朝鮮の加羅地方と似ていることは注目すべきである。こ

のように朝鮮側の土器と比較すれば船橋遺跡の土器は器形においてかなり早い時期の特徴を見せて居るので、日本の古墳時代の土器編年においては最も早い位置に置かれるべきだと考える。従って日本の古墳時代の土器は最初から土師器と須恵器とが同時に作られたのではないかと推測されるのである。（中　略）

畿内地方から遠く離れた地域には畿内地方とはやや異なった土器文化が行われたことはよく知られている通りである。そのうち最も著しい点は壺形や甕形の土器において割に小さい猪口形平底がつけられていることである。このような小さい猪口形平底はいうまでもなく弥生式土器に特徴的なものであったのであり、その伝統が古墳時代の土器にまで残ったものである。また他の一つは二重口縁の手法が時に見られることである。これもいうまでもなく弥生式土器に特徴的な手法であったのである。

このような猪口形平底や二重口縁は例えば関東地方、東北地方の土器に見られるものであり、また、中部地方、北陸地方などの土師器にもあらわれているものである。このように弥生式土器の特徴が土師器に継がれていることから、土師器が弥生式土器から発展したものと考えがちであり、従ってこのような土師器を土師器の編年において最も早い時期のものと見なす危険があるように思われる。しかし私はこのような畿内地方から遠く離れた地域には、弥生式土器が遅くまで作られたところに畿内地方から土師器の土器文化が伝えられて複合したのであり、年代的には古墳時代のやや後れた時期のものもあるようである。それはこれらの地方の土師器遺跡からは猪口形の平底や二重口縁の土器とともに甕が出土する例がかなりあることからもその年代の遅いことを知ることが出来る。何となれば甕は朝鮮においてもやや後れた時期にあらわれるものであるからである。

六

結論として私は畿内地方で土師器と須恵器が伴なう遺跡を日本においては最も古い遺跡と見るのであり、この古代の文化中心から遠く離れたところには遅く土師器だけが伝わり、それまで作られた弥生式土器の伝統と複合したと見たいのである。須恵器は胎土の選択、窯法の複雑さ、熟練した陶工の稀少などの理由から畿内からはなれた地方には伝わり難がったのかも知れない。そのために地方には主として土師器だけが作られたのではないかと思われる。

前に述べたように畿内地方へ土師器と須恵器が同時に朝鮮の加羅地域から伝えられた。つまり土師器の起源も大陸にあり、それは朝鮮において須恵器と同じ土器文化として始められ、発達した。その土器文化が日本へ伝わり、特に畿内地方でさかえたと思われる。畿内地方には須恵器の窯跡が多く発見されており、早い時期のも知られているのはそれを証明するといえよう。ただ土師器の窯址は簡単な露天窯で焼いたから、それがほとんど発見されないだけである。

以上のように土師器の起源をも大陸に求め、それが須恵器と同時に日本へ伝えられたとする観点を取れば今までの土師器及び須恵器の編年は再検討されなければならないかと思われる。

文献上からは日本書紀雄略紀の陶部（すえつくり）と土師部（はじべ）の記事が注目される。雄略紀七年の条に

是に由りて、天皇、大伴大連室屋に詔して、東漢直掬（やまとのあやのあたひつか）に命せて、新漢陶部高貴（いまきのあやのすえつくり）・鞍部堅貴・畫部因斯羅我・錦部定安那錦・譯語卯安那等を、上桃原・下桃原・真神原の三所に遷し居らしむ　とある。雄略七年は西紀四七三年にあたり、五世紀後半のことになるが、須恵器の製作がこの時に始まったのでなく、多分その前から渡来した陶工たちの集団を「部」に編成したことを意味するのであろう。新漢、すなわち「いまきのあや」というのはいうまでもなく「新しく朝鮮から渡来した人」を意味するものである。「陶部」は「すえつくり」と訓まれるが、日本の考古学で古墳時代の硬い灰陶を「須恵器」と名づけたことから、前記の日本書紀の「陶部（すえつくり）」を最近の考古学で名づけた「須恵器」のみを作った集団と誤り考えられることもあるようである。この「すえ」或いは「すえのうつわ」という古語の意味はよく分らないが、私は多分こ

の「すえ」或いは「すえのうつわ」という言葉はただ「土で作ったうつわ」すなわち土器という意味ではなかったかと思う。つまり軟質の土器も硬質の土器もひっくるめて「すえ」といったと思われる。軟質の土器を「土師器」、硬質の土器を「須恵器」として区別して呼ぶようになったのは最近考古学界で作った用語に依るものであることはいうまでもない。

また上掲の書紀の記事に陶部高貴以下の技術者達を上桃原・下桃原（以上河内）・真神原（大和）の三カ所に遷し居らしめたというのは注目すべきである。つまり陶部が畿内に置かれたのであり、われわれが土師器や須恵器が畿内に最も早く伝えられたとする考え方をうらずけるものと信ずる。既述のようにわれわれが畿内で発見された土師器と須恵器が最も古い形式のものであるとする見解をも傍証するとも考えられる。

土師器については書紀の雄略紀十七年の条に

土師連等に詔して、朝夕の御膳盛るべき清器を進らしめよとのたまへり。是に、土師連の祖吾笥、仍りて摂津國の来狭狭村・山背國の内村・俯見村・伊勢國の藤形村・及び丹波・但馬・因播の私の民部を進る。名けて贄土師部と曰ふ

とある。ここに「清器をたてまつらしめよ」とあるのは注目すべきで、「清器」とは必ずしも今日の考古学でいう軟質の「土師器」を意味するのではないと思われる。かえって「清器」というのはよく焼けた硬いやきものを意味するかも知れない。そしてこれらの土器を作る「私の民部」の住地の分布が大阪・京都など近畿地方が多いことは注目される。そしてこれらの民部がこの時「贄土師部」と名けられたとあるのは、これらの民部が朝廷に土器を作ってたてまつる部に指定されたことを意味するのであろう。とにかくここにいう土師部というのも必ずしも軟質の土器だけを作ったという証拠はないようである。故に最近の考古学界で作られた土師器や須恵器の用語のために日本書紀にある土師部や陶部の意味が誤り解釈されてはならないであろう。